

2010 年度

GIARI 研究大会記録集 (質疑応答要旨)

日時：2010 年 4 月 24 日 (土)

場所：19 号館 710 教室

第1部 GLARI 研究成果の「まとめ」・出版企画について

(1) 「アジア統合理論」研究会成果について

質問応答記録

「アジア地域統合学序説」 平川幸子 (記録：洪)

天児：地域内の新しいガバナンスについて書く必要：既存のガバナンスをどうやって再編成しているのか。たとえば、ローカル、コミュニティレベルにおけるガバナンス等。

梅森：アジア地域統合の理論を整理する際、地域統合の理論だけではなく、「反アジア地域統合」の理論をレビューして加えることが必要。肯定的理論だけでは限界がある。

黒田：アジア地域統合の理論研究を行うとき、

- ①多様な分野における既存の理論を検証していく。 ②新しい理論を提示する。
- この二つのプロセスが混乱しないように分けて説明すること。

トラン：地域統合学として、アジアだけではなく他の地域にも適用できる理論が求められる。

第一部・フラッグシップ三巻についての討論。

「アジア地域統合と制度—学際的アプローチ」 勝間田 弘 (記録：金)

松岡：特に、20年間の社会学の中で展開されてきた「制度論」といったアプローチに着目したアジア地域統合のことである。

天児：「東アジア共同体憲章」ということをここで扱うことについて、それは一人の学者による議論であって、そういった議論として扱うことは構わないが、憲章として(ASEANにおいてならば分かるが)ここで主に扱うことについては疑念がある。必ずしもそれだけでなくてよいのではないか。

梅森：平川さんの提案とは対照的であることが面白い。同じ問題に関して異なる内容を含めているところが印象深い。更に、二つの質問がある。

- ① 制度とは何なのか。様々な学問領域(ここで挙げられる主な三つの領域)における制度論について紹介するだけでは足りない。
- ② 「制度」に関して語る際、制度ではないものとして想定しているもの、つまり、「制度」といった枠組みに入らないものに関しては、どう捉えればよいのか。それとどう関連づけて考えていくのか。制度でないものは何があるのか、それを考えた上で、この制度論を展開する必要がある。

勝間田：制度ではないものは、インフォーマルなもの、かつ、共有されていないものを示す。
例えば、日本のナショナリズムは日本以外では共有されない。そこから制度というものを広く捉えていく。

黒田：平川による報告をも大きくは制度論に入ると思う。つまり、勝間田の意見ともかなり重なる部分があると思われる。

植木：制度論、そして、この地域における制度の特徴に関するところに同意する。制度にはこの地域の文化などが含まれる。制度も文化である。このようなアジア地域の現状を制度論が多く使っているフォーマルな部分（制度の多くはフォーマルである）と、どこまで結びつけて説明することができるか。

「グローバル化とアジア地域統合」 金ゼンマ （記録：劉）

寺田：三人は、内容に関しては、擦りあわせしたことがありましたか？

松岡：その問題は、後ほど全体討論後、話しましょう。
今はキムさんの発表内容に対して、何かありますか。

寺田：内容は盛り沢山で、とても良いですが、地域統合について経済理論ではどのように書く予定でしょうか。いわゆる「すべき論」で書くのか、「分析論」で書くのか。

黒田：たとえば、デ・ファクトの統合に焦点を当てた分析を書くのはどうでしょうか。グローバル化とリージョナリズムをめぐる議論ですが、いろいろなモデルがあるので、レベルを分けて書くのはどうでしょうか。

植木：非常に包括的な内容で大変勉強になりました。一冊の本にするので、因果関係がはっきりできれば、とても良い本になると思います。実証編で、経済、政治、社会の三つの側面から全部実証することはやや無理ではないかと思いますが、コアの部分は何ですか。それを実証すればよいのではないのでしょうか。

金：確かに。ところでこの前での理論研究会で皆さんの意見とコメントを頂き、今日このような提案になりました。どちらの選択に関しては、私もあまり自信がないので、叩き台にさせていただきたく思います。

(2) 研究成果の出版企画について (フラグシップの三巻) (記録：堀内・島崎・三牧)

(午前)

天児：三巻の構成をどうするかについて、まず三巻の間の整合性、連携の問題があり、もう一つには重複性の問題がある。そこで、次のような三巻に整理することを提案したい。

- (1) 理論としてのアジア地域統合…地域統合の構造・枠を見るもの。勝間田の提起した問題もここに含める。
- (2) 歴史の中のアジア地域統合…時間軸で見る。梅森が総論を書く。
- (3) グローバル化の中のアジア地域統合…水平的に見る。深川に執筆の指名がある「グローバルとリージョナル」の問題を、ここの総論で問題提起として論じる。

浦田：天児提案はわかりやすい。勝間田・金の提案は各々の単著で扱った方がよいのではないか。

地域統合という現象を「理論化」するという平川の書き方には経済学者として違和感がある。経済学は理論が先にあり、それをたとえば東アジアに当てはめ、分析をして、モデル構築をする。

深川：理論的な普遍性をいかに追求するかという問題、東アジアの現象が空間的なオープンネスを持ってきたことをいかに説明するかという問題、そして地域固有の理屈としての歴史をいかに記述するか、という問題に整理できる。

経済学の役割。東アジアで起こっている現象は、既存の理論では説明がつかないが、ネットワーク論、空間経済学など新しい理論によって説明できるようになりつつある。しかしそれがまだメジャーなものになっていない。また、市場のダイナミズムがこの地域を引っ張っているということをどう説明するか、という課題がある。FTA も、もともとは市場の働きが先にある。市場と制度の関係。

植木：「理論」をまとめた巻はどういう姿になるのか。誰がどう言っているという話では成り立たない。たとえば、統合に関する先行理論をそれぞれの分野の統合の現状に当てはめてみて、その説明能力を問うてみるというやり方がある。

天児：このフラグシップ編に加えて、「複合イシュー編」というものを考えることができる。政治・経済・社会という従来の分け方ではないものである。今回メンバーが出してきた各出版計画は、この意味でみな複合研究だといえる。

黒田：理論の巻においては、欧州統合などの分析から出てきた従来の理論・モデルの検証と、新たなモデルの構築を目指していくことがイメージできる。

実証ということについては、同じ本の中に理論と実証があるという形もある。一方で、三巻本にするときに、三巻目を「グローバリゼーション」とするのではなく、第1巻・第2巻の「歴史」「理論」に続く、「実証」の巻とすることもできる。岩波の第4巻はあくまで「図説」であって、実証にはなっていない。

(午後)

赤羽：アジアという地域において統合の問題を論ずることの意義を強調してもらいたい。

アジアの現実に対しても通用するような普遍性のある理論を見出すと同時に、欧州や北米など他の地域の統合の動きとも比較して、「アジア的なもの」を明らかにしてほしい。そうしたことを、総論の部分などでもよいので、誰かがどこかで言及してもらいたい。アジアにおける統合の現状について、アジア以外の人たちに知らせる必要があるからだ。

Shu：東アジアの地域統合の特徴を明らかにすべきである。たとえば、欧州の統合においては、経済的なスピルオーバーが強調される。しかし東アジアでは地域的な生産ネットワークの広がりにはあっても、スピルオーバーが見られない。その原因は何か。

勝間田報告において、インフォーマルな制度の重要性が指摘されていたが、なぜそれが重要なのかを知りたい。

梅森：天児提案に関して言えば、「歴史」ということを考えた場合に、それが「理論」と「空間」ということにどうかかわっていくかという点が重要。「理論の歴史」という観点があるし、また空間という意味では、トランスリージョナルな歴史をどう構成していくかということがある。そのように、空間の問題もいれて考えざるを得ない。天児の整理の仕方は一見いいが、歴史の無い理論、現状を踏まえない理論というものはいないし、歴史を論じる中でも、現状分析を踏まえてそれを過去に投影するということがあり、そこにまた理論的な問題が入ってこざるを得ない。ただし、天児提案は出発点となるものではある。

平川：私が一つの本の中に理論と歴史の両方を入れたのも、梅森と同じ考えがあった。パート1の理論のところではなんらかの結論が出たとしても、それがアジアの現実を説明できなければ意味がない。だから理論と歴史はくっついているべき。ここで歴史と言っている中にも理論が入っている。歴史といっても、単に一次資料を参照して起きたことを記述していくというのではなく、歴史への切り込み方を重視し、理論的なものと一体となった歴史を書いているつもりである。

天児：もちろん、歴史を語らないで理論や現状を語ることは不可能。自分が言っているの

は、ある論文が何を到達点とするかということ。例えば、アジアのリージョナリズムを理論的に説明することが到達目標となっている論文は「理論」に分類するという。そこで現実の動きを全く無視するなどということはありません。

問題は、それらを一冊の本の中に入れないとそれが分離されていると解釈するのかわか。叢書として刊行する場合、特にこのフラッグシップの部分は、三冊で一つのまとまりだと考えていいのではないか。一冊の中に理論と歴史をつめこまないとイケないというわけではないはず。

浦田：三冊もできるようなテーマがあるのか、という現実的な問題もある。

松岡：三巻で一つのまとまりとするにしても、各巻がそれぞれのまとまりをもち、それぞれ一つのコアをもったものができるかどうかということも重要である。

植木：第1巻で理論を扱うと、第2巻はそれを受けの形で関連付けられている方が、3巻本ということだと考えるといいのだが、はたしてそうなるのか。あるいは、それぞれの視点はあっても、統合がどのような形で発展してきているのかという通史がディスクリプティブにわかるような、実証的な歴史として描くのか。どちらを取るかで中身が変わってくるので、それを整理したほうが良い。

また、第3巻をグローバルゼーションとするのはよいが、それは第1巻・第2巻と性質が変わってくるので、どのように位置づけるのか。

天児：「グローバルゼーションの中の地域統合」ということと言えば、IMFなどを出してきた方向性に対して、アジアの中でそれをどう受け止めながらどのように展開していくのか、ということが論点になる。

植木：「地域」対「世界システム」という言い方をすれば、グローバルゼーション以前から、常に地域と世界との間で包括されたり反発したりというせめぎあいがずっとあった。

平川：私も最初は、シリーズ全体のタイトルを「GIARI モデルの理論と実践」として、第1巻・第2巻で理論・歴史を扱い、第3巻では東アジアで起きている実践的な問題に焦点を当てるといった形をイメージしていた。

天児：金さんのレジュメで言えば、「Ⅲ」の「実証編」のところ前面に出てくるということ。

松岡：この三つは、つまり「理論」「歴史」「実証」と整理できるが、グローバルゼーション

ンの部分が「実証」だけなのか。

黒田：歴史と理論ということであれば、政治史と政治学史、経済史と経済学史がまったく違うものであるように、「歴史」においては政治史や経済史のような「アジア統合史」を扱い、「学史」的なものは、いままでの理論的な展開と、さらに新しい理論を出していくことも含めて、「理論」の中に入れていくという形にするとわかりやすい。そして第3巻はまさにコンテンポラリーな状況の中でのデ・ファクトを見ていくという一冊になる。

浦田：岩波の4巻本の第4巻をもっとわかりやすく説明するというのが、今回の第3巻となるのではないか。

青山：第3巻について。アジアではグローバリゼーション・ナショナリズム・地域統合の3つが同時進行している。特にアジアではナショナリズムが強い面があり、第3巻を「グローバリゼーション」とするとむずかしいかもしれない。第3巻はやはり「実証編」にした方がより具体的に内容が見やすくなる。

天児：ネーミングの問題なのでは→（実証）という言葉について。

松岡：現在の世界の状況を具体的に示すには、どういった枠組みが必要なのか。

浦田：まず現状がどうなっていて、そのあとに、それをどう説明するか、またその歴史的な背景はどうか、ということになるのでは。3巻目に「現状」が出てくることには違和感がある。

松岡：「歴史としてのアジア統合」について：遠藤氏の『ヨーロッパ統合史』が描いているような、歴史としてのアジア統合史を我々が作ることができるかということ、疑問である。

天児：そのような歴史を叙述しても面白くないのではないか。思想史をめぐっての議論のほうが面白くなる。

松岡：統合史を見る場合、アジアの場合はもっぱら「運動史」となり、それでは上滑りしたものになる。だから思想史として見ていくというのはよいが、思想史、理論史としてのみ整理すると、今度はそれがどれだけ実態を反映しているのかということが問題となる。

黒田：第1巻に regionalization の歴史と regionalism の思想史を入れ、学史・理論史を第

2巻に入れるという整理もできる。

梅森：アジア地域統合史をヨーロッパ地域統合史と同じレベルで記述していくのは困難である。ヨーロッパ統合は達成されているが、アジアは統合の途上である。双方を比較し、その差異がどのような意味をもつかを議論すべきである。

アジア統合を推し進めているものが経済であるなら、経済史の議論が重要。まず経済史の議論があり、その後に、思想史あるいは、運動史となるのは良い。

現在の議論をまとめたい。現在オーバーラップしているものを整理する必要がある。取り上げる価値のある問題なのか、確認する必要がある。経済史の部分は欠けている。また社会領域部分（インターネットの問題、日韓間のネット上の攻撃によりサーバーが落ちるなどの現象）、大衆文化・カルチュラルスタディーズとしての分野も重要な問題として残されている。これらにどこかで触れる必要がある。

ミン：植民地や冷戦など、歴史上の事実・現実がどのように地域統合に影響をもたらしているのかという観点は重要。また歴史認識の問題はどうするか。現実に現れた問題を含めて、地域統合の視点を見ていくべき。

天児：第二次大戦以前の統合史の議論は日本が中心となっている。東亜共同体をみてもわかるように、日本が中心となって、そこにアジアのリーダーたちが乗ってってきていた形。政治的に言えば、戦後にアジアを動かしたのは、ナショナリズム・独立国家形成の問題。そこから、ネイションを超えた議論としては非同盟運動や第三世界理論などの議論が出てくる。他方、経済で言えば、日本のアジアへの経済援助とそれによるアジアの経済復興と経済発展ということになるのではないか。

深川：東アジア統合については、成長の統合の話が中心となっている。それは歴史が浅く、プラザ合意、せいぜい1960年代以降のこと。それ以前との間にはかなりのギャップがある。経済史ということに固執すると、そうしたギャップをカバーすることが困難になる。かつての大東亜共栄圏のような議論に対して、現在の統合はグローバリゼーションに乗っかる形で進んでいるというものである。

梅森：むしろそうした違いを明確にさせるということが重要なのではないか。

浦田：18世紀頃からの流れから分析する必要がある。

寺田：アジア地域統合の特殊性を示したいのか、あるいは普遍性を示したいのか。また、歴史をどこまで踏まえて、歴史というのか。自分は東アジアの地域統合をさまざまな地

域的組織の形成のレベルで見えてきたが、そうすると歴史をたどるとしてもせいぜい50~60年代くらいまでしかたどれない。IPRの話を入れるのであれば、それは理論史というより思想史の文脈が入ってくる。そこにおいては戦前の歴史的な文脈が生きてくる。歴史をやるのであれば、それがどのように現在の理論とつながっているか、現在のアジアの地域統合を理解する上でどのように有益であるのかを示すべき。

平川：「アジア政経史」という文脈で見ると、戦前からの連続性をみることができるのではないか。先行研究（宮城大蔵氏）をみると経済と政治が関連づけて分析されている。戦後、最初はナショナリズムに固執していた政治リーダーが、ある時期から経済発展の重視という方向にシフトするというように、経済優先性という特徴がある。「アジア政経史」という観点からみると、浜下先生がやっている華夷秩序の問題にまでさかのぼることができる。

植木：今、何がどこまで進んでいるのか、進んでいないのかを知る本にすると良い。またそれは何をもって言えるのかを（実証研究を踏まえて）いえるようにする。その時代、時代にある統合論があるのではないか。発展レベルなども時代によって異なる。地域・地域にある統合論があるのでは。これらの3点がそろったものがあるとよい。歴史の部分もあって、今、何が起きているのではわかるのがあればよい。

松岡：理論的な部分もあって、実証的な部分もあるのがよい。

歴史という部分もあるが、それは思想史・政治・政治なのかそれは何かになるのか……。

浦田：アジア内部の差異をどうとらえるのかという視点の必要性。学際的一様な視点から一つの事象を捉えられる一もっと意識したほうがいいのでは。

植木：

1. 統合理論(といったものがもしあるとすれば)

—同じようなメカニズムがどこにでもあるという前提

—なぜ同じメカニズムがある地域では進んでいて、ある地域では進んでいないのかという
ことは様々な地域を見ないと見えてこない。一つの地域に分析対象を狭めるべきではない。

2. 「実証」とは？

今起きている現象を叙述することなのか、仮説をケースにあてはめて検証することなのか。

黒田：後者の意味での「実証」は、理論編に入る可能性がある。

勝間：アジア地域統合の現状と課題（+そこに至るまでの歴史）をまず一巻で明確に打ち出すべきではないか。

梅森：学際的アプローチとは、二つ考え方がある。

① 共通イシューの設定：それぞれのディシプリンから分析

② 共通のメソドロジ—違った領域を分析。そこから何が見えてくるか。

勝間田報告は「制度」というメソドロジ—で、多様な分野を捉えようとする試み。

→GIARI メソッド・GIARI メソドロジ—の提起へつながる、重要なものではないか。

浦田：「制度」とはメソドロジ—といえるのかどうか。

梅森：色々な事象を「制度」というパースペクティブから見るということ。必ずしも事象としての「制度」ではない。

松岡：今日の全体の議論の方向性としては、

FSP1—理論と歴史に分ける。

FSP2—理論に入れる。

FSP3—理論・実証+歴史

とまとめられるのではないか。

勁草書房（宮本）：感想と提言

アジア地域統合とは何か、何を指すものか、アジア地域統合を実現させるために何が必要か、というテーマが読者に受け入れられやすい。読むことで得られる具体的な果実・成果を提起する必要がある。この問題意識を共有した上で、学際的アプローチの必要性・・・などプロジェクトの特徴を示していった方がいいのではないか。

天児：アジア統合を「目指そう」という明確な意識はある。

地域研究からアジア地域統合「学」へ＝体系化：理論的説明+現状認識+歴史の文脈におけるアジア統合

第二部の1 植木、松岡、赤羽 各プロジェクトについて (記録：大平)

要旨：赤羽、植木の各プロジェクトについての議論が活発になされ、松岡のプロジェクトについての議論はなかった。

- 赤羽のロシア研究プロジェクトについては、理論枠組みと研究事例（アメリカの

関与)、論文執筆者の追加検討が要請された。

- 植木の朝鮮半島危機研究プロジェクトについては、研究事例の追加が要請された。

議論の流れ：

赤羽のプロジェクトについて

1. (天児：) 赤羽プロジェクトはユニーク； ロシア全体又は極東ロシアのいずれかを中心にアジア統合に関わる可能性があるのではないか。
2. (赤羽：) 仮に極東ロシアのみでも、モスクワの政策決定権とその行使の仕方について分析が必要である。
3. (天児：) ASEAN+7と捉えることは可能ではないか。
4. (赤羽：) ASEAN+7と捉えることは可能である。
5. (松岡：) EANET へのロシア参加に見られるように、ロシアのアジア統合への参画は確かに重要な動きだが、地域統合を研究するに当たってどのように重要であるのだろうか。
6. (赤羽：) ロシアが地域統合への参画を決意したとすれば、アジア統合のプロセスを混乱させる可能性も、推進する可能性もある。よって、ロシアとアジア地域統合の関係を議論することで、地域統合プロセス全体の動向を予測する将来への問題提起ができる。
7. (浦田：) いまや、「ASEAN+3+2 (ロシアとインド)」という言葉があるように、ASEAN 各国の中には東アジア地域統合プロセスにロシアの参画を望んでいる。よって、ロシア研究をアジア地域統合論に含めることは妥当である。よって、現状の計画より論文執筆者を増やしてはどうだろうか。
8. (赤羽：) ロシア研究を専門とする堀内 GIARI 助教に原稿執筆参加を打診し、提出期限も含め了解を得た。
9. (松岡：) GIARI 事業担当者からも執筆者を募ったほうが良いのではないか。
10. (赤羽プロジェクト参加者の更なる追加について、参加者からの肯定的反応なし)
11. (黒田：) アジア統合を論ずるとき、米国についての言及を抜きにすることはできない。よって、ロシアに加えてアメリカも研究対象に加えてはどうだろうか。
12. (天児：) 赤羽プロジェクトはロシア研究のみでも充分だろう。
13. (赤羽：) アメリカを研究対象とすると論文が2本になってしまうため、ロシアのみを研究対象とすることが妥当だ。
14. (寺田：) ロシアの各方面での地域統合への関わり方をまとめた論文を執筆するのか、それとも、理論的枠組みでの GIARI と関連性を示しながら執筆するのか。
15. (赤羽：) ローズマンは多領域での分析が必要だと主張している。よって、今回はその枠組みをロシアに当てはめて論文を執筆する。
16. (寺田：) ロシアのアジア統合への関与の仕方は、ロシアの対欧州政策や対 ASEAN

各国（特に対ベトナム）政策に影響を受けてきたはずであること、そして赤羽がアメリカでの出版計画を持っていることから、理論的枠組みが大きく問われるのではないか。

17. （赤羽：）理論枠組みについてはまだ検討中であるが、論文の中で寺田の指摘した内容について触れることは決まっている。

植木のプロジェクトについて

18. （天児：）「永い平和」が存在することをどのように証明するのか。地政学的説明か、パワーバランス論なのか。構造的説明が必要なのではないか。
19. （植木：）「永い平和」に一番危険な状況を生んだ1994年朝鮮半島危機について検討することで、アジア全体について検討したい。
20. （天児：）1994年朝鮮半島危機の検討は、全体の検討になりえず、あくまで一部についての検討に留まるだろう。
21. （寺田：）ルイスの冷戦構造論のように、北東アジアでは冷戦構造が続いているという前提に立ち、北東アジア論に限定してはどうか。
22. （松岡：）北東アジア論としての北朝鮮問題の議論が、果たして東アジアの普遍的問題に答えることになるだろうか。また、東南アジアを検討の範囲に含めるとしても、1970年代の熱戦以来の戦争状態の欠如を「永い」とするかどうかについて検討が必要である。
23. （植木・天児：）平和協定などの制度化された安全保障枠組みが乏しいにも関わらず、北東アジアのほうが東南アジアより「永い」平和を保っているのはなぜか。このことについて検討するほうがより研究が容易ではないだろうか。
24. （浦田：）多面的分析を可能にするため、深川など政治経済分野の執筆者も加えてはどうだろうか。
25. （深川：）朝鮮半島だけでは研究対象が狭く、研究事例が足りないのではないか。
26. （植木：）台湾海峡危機も含めて研究することは可能だ。

第二部の2 勝間、黒田、梅森各プロジェクトについて （記録：河路）

「アジアにおける人権ガバナンスの模索～国際規範、行為主体、ネットワークによる地域統合プロセス」（勝間）

- ・報告内容：報告者は、アジアにおける人権ガバナンスに関する出版計画について、次の4つの視点を構成メンバー・章立てと共に提示した。第一は、近年のASEANにおけるようなサブ・リージョナルな人権メカニズム形成についての議論である。第二には、社会的に弱い立場、たとえば子ども、女性、障害者、先住民、難民といったイシュー別の人権規範に関する議論である。第三は、アクター論として、国家以外のNGOや企業を含め、

国連のグローバル・コンパクトに対する取り組みを述べ、最後に第四として、大規模な人権侵害に対する紛争解決に向けた域内協力について、カンボジア、東ティモール、ミャンマー、ミャンマー等の東南アジアからチッタゴン等の南アジアまでを対象に論じる。

「アジア地域統合における高等教育国際化のダイナミズム—交流・連携・協力の新たなフレームワーク構築を目指して」(黒田)

- ・ 報告内容：報告者は、アジアの高等教育における地域協力・統合に関する出版計画について、次のような分析方法を提示した。第一に、高等教育におけるデ・ファクトの地域統合についての、経済的社会学的研究であり、第二に、高等教育における地域統合のための理念、理論的フレームワークを歴史的・政治的に分析し確認する。たとえば、アジアの域内・国内における多様性を考慮しながら学生の移動性を高める「アジアのボローニャ・プロセス」の他、アジアにおける高等教育の発展及び地域化を「従属型」や「新植民地型」よりも「中心」大学の「周辺」コントロールに対するカウンター・フォースや「雁行型」として説明することの有効性が論じられる。そして第三に、政府の政策や各大学の戦略等を対象にアクターを分析する。第四に、EUのエラスムス計画といった、他の地域との比較を行う。ASEAN、東アジア、そしてオーストラリア・ニュージーランドを含むアジア太平洋のそれぞれに共有されるフレームワークの構築を目指し、高等教育連携と協力の見通しを論じる。

「アジア統合の歴史的前提：理念・制度・運動」(梅森)

- ・ 報告内容：報告者は、現在に至るアジア地域統合の前史として国際的連帯の思想と運動を検討する出版計画について、著述の目的、意義と特徴、そして分野別の執筆担当を論じた。従来の一国的なナショナル・ヒストリーを超えるような共同研究として、アジアの地域的なネットワーク、特に従来帝国史が支配と従属の垂直的關係を扱うのに対して水平的關係による人的ネットワークの形成と展開を、次の三つのレベルから分析する。第一に、日中韓の各国内における理念に関して、第二に国際機関のインパクトといった制度面、そして第三に文化交流を含めた運動である。アジア地域における歴史認識の共有、そして現在の様々なアジア地域統合論に対する、その前史を踏まえた経験的視座からの提言を目指し、スタンダードで重層的なアジア地域統合史を構築する。

・ 質疑応答

松岡：地域統合史におけるスタンダードの意味は何か。

梅森：共通の知識となるようなモラル・サイエンスとしての歴史を、アジアに関心を持つ学生が理解する基準である。

天児：より時代と対象の範囲をより広げてアジアのネットワークを追求したほうが、イン

パクトが強いのではないか。

梅森：戦前が中心となっているが、より幅広く、東南アジアまでも含めて検討したい。

松岡：戦前の歴史と現在とにいかなる関係があるのか、歴史が現在に投げかける意義は何か。

梅森：過去と現在には切断がある。しかし戦前から戦後にかけての連続性を理解する必要がある。

平川：生きた環境において、世代間の繋がりがある。

寺田：「大東亜共栄圏」のような議論になりはしないか、現意義はあるのか。

梅森：完全に水平的なネットワークはありえず、必ず権力関係が入り込む以上、歴史は教訓としての意義をもつ。

植木：宗教の役割について、アジアには統一的宗教が欠如しまとまりがないと同時に排他性もないといえるが。

天児：もしもアジアを統一的宗教によって統合しようとする場合、戦前の天皇制のような問題が生じる。

第二部の3 ナギ・天児・浦田(栗田)・鴨川各プロジェクトについて (記録：本多)

質疑応答

“Transnational Migration –Migrants Roles in Promoting Social, Economic and Cultural Integration in the Asia Pacific” (ステファン・ナギ、ファーラー・グラシア)

松岡：ナギと話をし、Chapter を考え直して頂きたい。

「アジアの人間の安全保障とガバナンス (仮題)」(天児)

特にコメントなし。

「テキストブック アジア経済統合」(浦田、栗田)

松岡：構成をみると、「アジア経済論」でもよいのではないか。

栗田：執筆者が統合を意識して研究をしている人が多いので、「統合」の視点が入っている。「アジア経済統合」である。

深川：テキストブック・シリーズは別にした方がよい。産業調整をしないと自由化した意味がないので、そのあたりの話を入れるなど、現状が動いているので、そのあたりの状況を入れないといけない。

栗田：テキストブック・シリーズを入れるのはよいが、中間報告書に書いた「GIARI モデ

ル」の中の位置づけをどうするのか？最終報告書で「GIARI モデル」について触れないわけにはいかない。

「初学者向け教科書 『アジア統合を学ぶ人のための質的・量的分析手法（仮題）』（鴨川）

天児：テキストシリーズを作るのではあるのならば、（タイトルも含めて）バランスのとれたものを考えるべきだ。

浦田：鴨川さんの説明の中で、講義で学生に人気があったのが、「FTA と経済統合」だったという話が出たが、章に入っていないのはなぜか？

鴨川：入れる。

松岡：「アジア統合を学ぶ人のための」のフレーズがなぜ必要なのか？重要なのは、従来の質的・量的分析手法とどう違うのか？このフレーズは要らないのではないか？

天児：「アジア統合分析の研究手法」というタイトルはどうか？

岸：「アジア統合」との関連で質的・量的分析手法をとらえたものがない。

松岡：GIARI が対象とするのは、博士後期課程の学生であるが、テキストが対象とする「初学者」との関連は？

鴨川：大学院の一年生を「初学者」と位置付けている。

浦田：「質的・量的分析手法：アジア統合への応用」というタイトルが良いのではないか。

第二部の3 寺田、金、勝間田各企画について（記録：本多）

「東アジア地域主義論」（寺田）

天児：もう出版されることは決まっているようなので、GIARI としては三冊か買い取るなどの方法でサポートできればと思う。

「日本と東アジア地域統合：FTA 政策決定過程分析から」（金）

天児：出版社は特定しなくてよいのではないか。このテーマで出したいのであれば、他のプロジェクトの中に組み込むのも良いのではないか。

「Norm Diffusion and Regional Cooperation 規範の伝播と地域協力」（勝間田）

天児：英語の本なので、基本的には自分のコネクションを使って出版してほしい。

まとめ 天児 （記録：河路）

本研究大会では図書・シリーズ本の魅力がその計画と議論から感じられた。これが新たな2年間の研究成果となるよう期待したい。今後は、総論編・複合イシュー編・テキスト編の3つを分類の基準とし、複数回の研究会を通じて絞り込んでいく必要がある。この出版企画

は高度人材育成と組み合わされたものであり、若手研究者がそれぞれの研究テーマに向かい積極的に参加することが求められる。たくさんの意見を取り入れつつ、スケジュールを決定していく予定である。